

## 青年・成人期自閉症の適応の現状と課題

—追跡調査を通して—

加藤義男<sup>1</sup>・木村 真<sup>2</sup>・高橋 昇<sup>3</sup>・石母田明<sup>4</sup>・北村嘉勝<sup>5</sup>・三田祐一<sup>6</sup>  
(1993年10月12日受理)

### I 問題と目的

わが国において、鷺見(1952)<sup>1)</sup>が初めて自閉症症例を報告して以来41年が経過しており、青年・成人期を迎えた自閉症者の数も増え、彼らに対する指導や援助をどのようにすすめるべきかということが大きな課題となってきた。

これまでの主な自閉症追跡調査の結果をみると、「総じて自閉症の転帰は、その半数から多いもので70~80%が不良(poor)とされてきた」<sup>2)</sup>と言える。しかし、小林・村田(1990)<sup>2)</sup>による最近の追跡調査では、予後不良(poor)が47%であり、従来の結果に比べて減少している。これは、従来の調査の対象児が自閉症に対する認識が定まらないままに不十分な療育しか受けてこなかったのに比べて、小林・村田(1990)<sup>2)</sup>の対象児は発達障害としての理解のもとで積極的な療育を受けてきたことの成果とも言える。このように、青年・成人期を迎えた自閉症の社会的転帰は、それまで受けてきた療育の成果と社会的受け皿の整備との相互作用の中で表わされるものであり、一般的な予後像は今後とも変わりうる可能性を大いに含んでいる。

青年・成人期自閉症に対する処遇のあり方についても幾多の課題が残っている。筆者らは、加藤・木村(1987)<sup>3)</sup>、加藤ら(1987)<sup>4)</sup>において、自閉症の処遇の実態と課題についての調査を行い、青年・成人期に至っても対応上困難な不適応行動が多く示されていること、福祉施設における指導上の困難さが大きく存在していること、乳幼児期からの一貫した処遇が重要であることなどを指摘した。青年・成人期を迎えようとしている自閉症が増えている中で、義務教育卒業後の労働や生活の場の確保とそこでの指導法の開発、QOL(生活の質)を高めるための生活や余暇の充実などの課題を検討することが益々重要になってきている。

以上の問題意識に立って、本研究では、筆者らが以前から関与している18歳以上の自閉症者についての追跡調査を行った。本研究の目的は次の二点である。(1)青年・成人期自閉症の処遇の実態を把握し、社会的転帰と適応の現状および課題について考察を加えること。(2)青年・成人期自閉症の状態像の推移をおさえ、青年・成人期の発達課題や療育のあり方について考察を加えること。

---

1 岩手大学教育学部 2 国立南花巻病院 3 総合水沢病院 4 県立花巻養護学校  
5 カナンの園奥中学校園 6 岩手大学教育学部付属養護学校

## II 方 法

以下の要領にそって、面接および郵送による追跡調査を実施した。

### 1. 対象者

次の三条件を満たしている者を対象とした。①調査者が、幼児期から学童期にかけて何らかの形で関与しており、現在も継続してフォローアップしている者。②調査時点で18歳以上の者。③医療・相談機関等で自閉症との診断がなされている者。

その結果、5名の調査者（表1）によって、51名の自閉症者がリストアップされた。

表1. 調査者の内訳

調査者（職場）	対象者との初期関与の契機
A（養護学校）	養護学校担任として
B（障害児施設）	入所施設指導員として
C（精神科病院）	臨床心理担当者として
D（精神科病院）	臨床心理担当者として
E（大学教育学部）	幼児発達相談を通して

### 2. 調査方法および内容

以下の調査I～調査IVを実施した。

（1）調査I「個人情報についての調査」 調査者による記入および保護者へのアンケート調査の実施。質問項目は、生年月日、性別、主な既往歴、療育手帳の有無、障害年金受給の有無、処遇の経過、現在の所属、知能検査・発達検査の結果。

（2）調査II「社会的転帰に関する調査」 保護者、職場担当者、施設担当者へのアンケート調査の実施。社会的転帰（現在の処遇形態と処遇状況）に関する調査項目は、表2に示される。

表2. 社会的転帰に関する調査項目

		就 労 者		施 設 通 所 者		施 設 入 所 者
回答者		保 護 者	職 場 担 当 者	保 護 者	施 設 担 当 者	施 設 担 当 者
質 問 項 目	選択肢チェック	出勤態度 社会的活動への参加	待遇 仕事ぶり 人間関係	通所態度 通所を選んだ理由 社会的活動への参加	障害の程度 介護度 仕事ぶり 人間関係 今後の見通し	障害の程度 介護度 仕事ぶり 人間関係 今後の見通し
	自由記述	就労しての変化 仕事上の心配 生活上の問題 将来について 地域社会への要望	職種 アフターケアについて	通所しての変化 通所しての心配 生活上の問題 将来について 地域社会への要望	施設の種類 指導上の問題行動	指導上の問題行動

(3) 調査Ⅲ「現在の適応状況に関する調査」 小林・村田 (1990)<sup>2)</sup>の「現在の適応水準の判定基準」にもとづいて評価基準(表3)を作成した。評価は保護者、職場又は施設の担当者、調査者の三者がそれぞれ別々に実施した。

表3. 現在の適応状況の評価

適応水準	適	応	状	況
良 好 (Good)	1	就労ができていて、ほぼ満足のいく適応ができており、周囲からも仕事ぶりや能力が認められる存在になっている。		
	2	就労ができていて、特に人の手を借りず、ほぼ一人で普通の生活ができています。		
軽 快 (Fair)	3	多少は人間関係に変わった点が認められるが、家庭生活や社会生活が営まれている。今は就労できていないが、日常生活は特に人に迷惑もかけずにできている。		
不 良 (Poor)	4	かなり行動や人間関係に変わった点を認め、自立的社会適応ができず、人の援助が必要である。		
	5	社会性が乏しく自閉的で社会適応も困難で、周囲の人の援助や介助が必要な状態である。		

(4) 調査Ⅳ「状態像の推移及び現在の実態に関する調査」 言語、行動、対人関係の3領域11項目について、各種の発達テストを参考にして5～7段階からなる質問項目を作成した(質問項目を末尾「資料」に添付)。各項目ごとに、時期的変容をみるために、「3歳まで」「就学まで」「小学校」「中学校」「現在」の5時期に分けて調査した。保護者による記入を依頼し、未記入の部分について調査者が可能な範囲で補足した。

### 3. 調査時期

1992年5月～8月。

## Ⅲ 結 果

調査Ⅰ～調査Ⅳについて、対象者51名のデータが得られた。但し、未回答や不明の項目も存在し、結果の処理は得られた回答数にもとづいて行われた。

対象者51名の内訳は男44名、女7名(男女比6:1)。年齢は18歳～32歳、平均年齢22.9歳。

### 1. 個人情報

(1) 療育手帳等の有無 療育手帳有り29名、無し2名。有り29名中20名は「A級」所持であった。障害年金受給有り25名、無し4名。有り25名中18名は「1級」該当者であった。これからの結果は、本調査の対象者は重度の発達障害を示す者の割合が高いことを示している。

(2) 処遇の経緯 幼児期に、保育所、幼稚園、通園施設等に通所した者37名(92%)、通所しなかった者3名(8%)。就学ゆう予・免除を受けている者6名(15%)、受けていない者33名(85%)。

処遇変更(途中段階で、学級、学校、施設等を変更すること)の実態を表4に示した。変更の内訳は次のとおりである。小学校時期では特殊学級から養護学校へ16名、普通学級から特殊学級へ2名、情緒障害特殊学級から精神薄弱特殊学級へ2名、特殊学級から入院1名、通園施設から特殊学級へ1名。中学校時期では、別の養護学校への転校4名(施設入所のため3名、

表4. 処遇変更の実態

時期	変更有り	変更無し
小学校	22名 (56)	17名 (44)
中学校	6 (15)	34 (85)
青年期	9 (23)	30 (77)

\* ( ) 内は%。以下同様。

転居のため1名), ろう学校から養護学校へ2名。青年期では, 入所施設から通所施設へ3名, 別の入所施設への転園2名, 別の通所施設への転園2名, 就労先の変更1名, 就労から福祉作業所へ1名。

## 2. 社会的転帰

現在の処遇形態を表5に示した。施設への入所及び通所が41名(80.4%)と最も多く, 就労は8名(15.6%)であった。

表5. 現在の処遇形態

処遇形態	就 労	施設入所	施設通所	在 宅	入 院	計
人 数	8 (15.6)	21 (41.2)	20 (39.2)	1 (2.0)	1 (2.0)	51 (100)

### (1) 就労者について

①調査結果のまとめ (i)職種: 8名中6名は一般企業(鋳物工場, 油脂工場等の生産業種)の工員。他の2名は, 障害者のための福祉工場の工員。(ii)待遇: 正社員2名, パートタイマー2名。(iii)出勤態度: 「毎日喜んで出勤」6名, 「とても辛そうだ」1名。(iv)職場での仕事ぶり: 「時々指導や指示を与えるだけ」3名, 「付きっきりの指導が必要」1名。(v)職場での人間関係: 「それなりの反応があり, あまり気にならない」1名, 「孤立的で, 交流がなく自分流の過ごし方をしている」3名。(vi)アフターケアについて: アフターケアを望む声が強くと, 「以前に関わった先生の名前を言うと落ち着く」「学校などで担当した先生の励ましがとても必要」「本人への指示をどのように伝えたらよいか教えてほしい」等の訴えがみられた。(vii)社会的活動への参加状況: 「積極的に参加」1名, 「参加させたいが, そういう場がない」3名, 「本人が嫌がる」1名。(viii)就労しての変化: 「規則正しい生活ができるようになった」「自分で色々なことをするようになった」「大人になった」「反応が良くなった」「お金の価値がわかるようになった」「時間配分ができるようになった」「家の手伝いもしてくれるようになった」「社会人としての自覚がでてきた」。(ix)仕事上の心配なこと: 安全や健康面。解雇された時のこと。時々, 精神的に不安定になること。友人がいないこと。疲労度の限界がわからず, 体調が悪くても訴えられないこと。運動不足。(x)生活上の問題点: 「固執性が強い」「情緒不安定」「接客や伝言ができない」「バスの利用ができない」「他人からの話しかけを嫌う」。(xi)将来についての希

望：「親が年老いてからのことが心配」「自立できていけるグループホームが欲しい」「精神的安定を持續してほしい」。(xii)地域社会への要望：「相談にのってくれる総合的な機関が欲しい」

②小考察 就労後の変化として、自己コントロールや自発性が向上したなどの肯定的な評価をする保護者が多かった。その反面、雇用上の不安や、親が老いてからの不安なども見られる。職場担当者からは、就労後のアフターケアを望む意見が多く出されており、雇用の安定と継続のためにも就労先に対して適切な助言を行う等の援助をシステム化していくことが必要と考えられる。

### (2) 施設通所者について

①調査結果のまとめ (i)障害の程度：重度12名、中度4名、軽度3名。(ii)施設の種類：認可施設10名、無認可施設(福祉作業所)9名。(iii)日常生活の介護度：「部分的介護が必要」11名、「ほぼ自立」7名。(iv)通所態度：「毎日喜んで通っている」11名、「時々通うことを拒否することもある」2名。(v)施設での仕事ぶり：「そのパートは全く任せておける」1名、「時々指導や指示を与えるだけ」13名、「付きっきりの指導が必要」4名。(vi)施設での人間関係：「よくとけこんでいて全く気にならない」1名、「それなりの反応があり、あまり気にならない」2名、「孤立的で、交流がなく自分流の過ごし方をしている」14名。(vii)今後の見通し：「入所施設に変えた方が良い」2名、「今のままで適切」12名、「場の確保ができれば、就労も可能」1名。(viii)指導上問題となる行動：情緒不安定、こだわり、興奮、集中力のなさ、行動や態度のムラ、対人関係のとれなさ、攻撃的行動。(ix)通所施設を選んだ理由：「家庭におきたかったから」8名、「他に行き場がなかったから」6名、「働く場がなかったから」1名。(x)社会的活動への参加状況：「積極的に参加」2名、「参加させたいが、そういう場がない」4名、「本人が嫌がる」4名。(xi)通所しての変化：「生活リズムが安定した」「言葉が増えた」「忍耐力が出てきた」「明るくなった」「持続性が出てきた」「自閉性が改善された」「指示に従えるようになった」「こだわりが増えた」。(xii)通所していて心配なこと：「情緒的安定が得られるかどうか心配」「こだわりが強い」「環境の変化についていけない」「対人関係がとれない」「将来どうなっていくか心配」「親が送迎をいつまで続けられるか心配」。(xiii)生活上の問題点：「こだわりが強い」「融通がきかない」「自分中心の行動をとる」「パニックを起こす」「性的な問題」「外出を嫌う」「食べすぎる」「対人関係がとれない」「独語がある」。(xiv)将来についての希望：「入所施設に入れたい」「親亡き後のことが心配」「就労して欲しい」「生活面で自立して欲しい」「他人に迷惑をかけないで欲しい」。(xv)地域社会への要望：「奇声やらがあるため好奇の目で見られる」「社会的活動に参加できる場が欲しい」「地域社会の理解を求めたい」「親の気持ちをもっと理解して欲しい」「医療機関の理解が欲しい」「生命保険に加入できるようにして欲しい」。

②小考察 可能な限り家庭や地域で生活させたいとする親が増えており、福祉作業所が受け皿として重要な役割を果たしている。通所し出してから、生活リズムの確立や持続力の獲得などのプラス面も多くみられているが、同時に、パニックやこだわり行動等の問題をどのように乗り越えていくかなどの課題も示されている。将来の不安や地域社会の理解を求める声も多く出されている。

### (3) 施設入所者について

①調査結果のまとめ (i)障害の程度：重度19名(90%)、中度2名(10%)。(ii)日常生活の介護度：「生活全般にわたって介護が必要」4名、「部分的介護が必要」12名、「ほぼ自立」5名。(iii)施設での仕事ぶり：「時々指導や指示を与えるだけ」6名、「付きっきりの指導が必

要」13名。(iv)施設での人間関係：「それなりの反応があり、あまり気にならない」3名、「孤立的で、交流がなく自分流の過ごし方をしている」16名。(v)今後の見通し：「当分は現状での処遇が必要」20名、「家庭の受け入れができれば退所も可能」1名。(vi)指導上問題となる行動：情緒不安定、こだわり、徘徊、器物破損、危険認知の弱さ、睡眠障害、奇声、性的問題、盗食。

②小考察 重度の者が9割を占め、「当分は現状での処遇が必要」とうけとめられている者が大部分を占めている。また、指導上問題となる行動として、徘徊や器物破損などの深刻な行動も指摘されている。これらの点からみて、入所施設における療育及び生活の質の向上ということが今後とも検討されていくべき重要な課題と言える。

### 3. 現在の適応状況

現在の適応状況に関する結果を表6に示した。(保護者と職場・施設担当者による評価はデータが限られており、全体像を示しているとは言えない。そこで、以下、調査者による評価結果をもとに論じていく。)

表6. 現在の適応状況

適 応 水 準		1	2	3	4	5	計
評 価 者	保 護 者	2 名 (7)	3 名 (11)	7 名 (25)	5 名 (18)	11 名 (39)	28 名 (100)
	職 場・施設担当者	0 (0)	0 (0)	3 (10)	8 (28)	18 (62)	29 (100)
	調 査 者	1 (2)	6 (12)	6 (12)	10 (19)	28 (55)	51 (100)

水準5 (very poor) が最も多く、水準4 (poor) とあわせると74%を占めている。このことは、青年・成人期に至っても自閉症特有の行動特徴を多く示し、介助や援助を必要としている者が半数以上にのぼっているという実態を示している。

### 4. 状態像の推移及び現在の実態

言語、行動、対人関係の3領域11項目についての調査結果は以下のとおりである。

#### (1) 言語

表7によると、加齢に伴って、より高水準の言語表出が可能となっている。「3歳まで」に話し言葉を持たない者が87%おり、実用的な言葉の使用が可能なのは2%のみであった。実用的な言語表出の割合が増えるのは「小学校」からであり、青年期になって自然なコミュニケーションができる者の割合が多くなっていく。しかし、「現在」においても話し言葉を持たない者が25%もあり、コミュニケーション障害が青年期になっても十分に改善されていないことを示している。

表8によると、言語理解力は加齢に伴って徐々に高まっており、「現在」では57%の者が複数の指示理解が可能となっている。しかし、残りの43%の者は簡単な一つの指示理解可能な水準にとどまっており、半数近くの自閉症は青年期に至っても言語理解の水準が低いことを示している。

「言葉やコミュニケーションについて困っていること」についての質問に対して、主として

表7. 「話す力」の時期的変容

時期 水準	3歳まで	就学まで	小学校	中学校	現在
1	19名 (43)	8名 (18)	5名 (12)	4名 (9)	4名 (9)
2	20 (44)	18 (40)	10 (23)	7 (16)	7 (16)
3	5 (11)	18 (40)	15 (34)	11 (26)	7 (16)
4	1 (2)	1 (2)	9 (20)	6 (14)	6 (14)
5	0 (0)	0 (0)	4 (9)	14 (33)	9 (20)
6	0 (0)	0 (0)	1 (2)	1 (2)	11 (25)

表8. 「理解する力」の時期的変容

時期 水準	3歳まで	就学まで	小学校	中学校	現在
1	20名 (47)	12名 (27)	2名 (5)	1名 (2)	0名 (0)
2	12 (28)	8 (18)	5 (11)	5 (12)	3 (7)
3	9 (20)	10 (23)	9 (20)	5 (12)	5 (11)
4	2 (5)	12 (27)	8 (18)	7 (16)	8 (18)
5	0 (0)	2 (5)	7 (16)	3 (7)	3 (7)
6	0 (0)	0 (0)	4 (10)	7 (16)	8 (18)
7	0 (0)	0 (0)	9 (20)	15 (35)	17 (39)

次の三点が示された。①言語表現が適切にできない。そのために、不機嫌な時に何の原因かがわからない。自分の気持ちを伝えられないためにパニックになる。自分の健康状態を正確に伝えることができない。②その場にそぐわないことを一方的に話したり、同一のことを何回もくりかえして言う。③言語の理解力が弱い。

(2) 行動

表9によると、著しく活発（多動）な者は、「就学まで」60%、「小学校」40%、「中学校」から「現在」は10%前後となり、加齢に伴って減少している。また、「現在」において活動性の低い（寡動）者が40%を占めており、このことは青年・成人期自閉症の重要な発達課題のひとつと思われる。

表10によると、強いこだわり行動は加齢に伴って若干減少しているが、青年・成人期に至っても半数近くの者に強固に残っている。こだわり行動の内容をみると、加齢に伴って、単純な物へのこだわり（水、車、電話帳などへのこだわり）から強迫的なこだわり（約束ごと、同一メーカー、同一時間などに対して強迫的と思えるようなこだわりを示す）へと変化している傾向がみられた。

表11によると、偏食は、加齢に伴って明らかに改善されている。とりわけ、「小学校」以降に改善している者が多く、「学校給食のおかげで食べられるようになった」との記述が12名もみられた。

表12によると、かんしゃくは、加齢に伴って少しずつ軽減している。しかし、「現在」においても「非常に深刻」「しばしばある」者が27%もあり、青年期以降においてもかんしゃく行動への対応は重要な問題である。かんしゃくの原因として、同一性保持や変化への抵抗といった行動特徴との関連でおきる場合、意志が通じないで思うようにいかなかった場合、物事を強要された場合、感覚的な過敏さとの関連でおきる場合などがあげられた。

表13によると、自傷を示す者は、他の行動項目と比べると全体的に少ない頻度であるが、幼児期は比較的少なく、学童期においてより多く示されている傾向がみられた。

表9. 「活動水準」の時期的変容

時期 水準	3歳まで	就学まで	小学校	中学校	現在
1	25名 (57)	26名 (60)	17名 (40)	5名 (12)	4名 (9)
2	9 (20)	10 (23)	15 (35)	19 (45)	13 (30)
3	2 (5)	2 (5)	4 (9)	3 (8)	9 (21)
4	4 (9)	3 (7)	5 (12)	14 (33)	15 (35)
5	4 (9)	2 (5)	2 (4)	1 (2)	2 (5)

表10. 「こだわり行動」の時期的変容

時期 水準	3歳まで	就学まで	小学校	中学校	現在
1	23名 (61)	20名 (48)	17名 (40)	17名 (40)	15名 (34)
2	1 (3)	8 (20)	13 (30)	5 (11)	4 (9)
3	8 (21)	9 (22)	9 (20)	14 (33)	13 (30)
4	2 (5)	2 (5)	2 (5)	2 (5)	8 (18)
5	4 (10)	2 (5)	2 (5)	5 (11)	4 (9)

表11. 「偏食」の時期的変容

時期 水準	3歳まで	就学まで	小学校	中学校	現在
1	10名 (24)	1名 (2)	0名 (0)	0名 (0)	0名 (0)
2	14 (33)	17 (40)	4 (9)	1 (2)	0 (0)
3	7 (17)	13 (32)	17 (40)	13 (31)	6 (14)
4	3 (7)	2 (5)	8 (18)	8 (19)	8 (18)
5	8 (19)	9 (21)	14 (33)	20 (48)	30 (68)

表12. 「かんしゃく」の時期的変容

時期 水準	3歳まで	就学まで	小学校	中学校	現在
1	13名 (34)	14名 (34)	12名 (27)	6名 (14)	3名 (7)
2	13 (34)	11 (27)	11 (25)	14 (32)	9 (20)
3	2 (5)	5 (12)	10 (23)	8 (18)	10 (23)
4	3 (8)	4 (10)	7 (16)	12 (27)	11 (25)
5	7 (19)	7 (17)	4 (9)	4 (9)	11 (25)

表13. 「自傷」の時期的変容

時期 水準	3歳まで	就学まで	小学校	中学校	現在
1	1名 (2)	1名 (2)	5名 (11)	5名 (11)	1名 (2)
2	6 (15)	8 (20)	11 (25)	7 (16)	5 (12)
3	2 (5)	4 (10)	5 (11)	7 (16)	8 (19)
4	3 (8)	3 (8)	6 (14)	7 (16)	7 (16)
5	28 (70)	24 (60)	17 (39)	18 (41)	22 (51)

(3) 対人関係

表14, 表15によると, 加齢に伴って肉親の大人や兄弟姉妹との関係は着実に広がってきており, 交流がもてるようになってきている。しかし, 表16にみられるように, 他人との関わり方はかなり限局されており, 「現在」においても他人と普通に交流できるとする者は12%にすぎない。さらに, 異性との関係では, 広がりよりも一層限られている(表17)。異性への関心をほとんど示さない者が, 「中学校」64%, 「現在」52%に達している。反面, 中学校以降になると異性への関心を示す者も増えてくるが, 相手の立場に立った関わり方ができず, 社会的にみて不適切な関わりをする者が多くみられる。

表14. 「肉親の大人との関わり方」の時期的変容

時期 水準	3歳まで	就学まで	小学校	中学校	現在
1	16名 (41)	5名 (12)	0名 (0)	0名 (0)	0名 (0)
2	1 (2)	7 (17)	1 (2)	0 (0)	0 (0)
3	10 (26)	11 (26)	12 (28)	7 (17)	5 (12)
4	8 (21)	10 (24)	9 (21)	12 (28)	5 (12)
5	4 (10)	9 (21)	21 (49)	23 (55)	32 (76)

表15. 「兄弟姉妹との関わり方」の時期的変容

時期 水準	3歳まで	就学まで	小学校	中学校	現在
1	20名 (67)	16名 (48)	8名 (22)	5名 (14)	3名 (8)
2	0 (0)	2 (6)	3 (8)	2 (5)	1 (3)
3	5 (16)	7 (22)	9 (24)	9 (25)	5 (14)
4	2 (7)	4 (12)	6 (16)	5 (14)	6 (17)
5	3 (10)	4 (12)	11 (30)	15 (42)	21 (58)

表16. 「他人との関わり方」の時期的変容

時期 水準	3歳まで	就学まで	小学校	中学校	現在
1	25名 (64)	13名 (30)	6名 (14)	3名 (7)	1名 (2)
2	4 (10)	7 (17)	5 (12)	4 (9)	1 (2)
3	6 (15)	15 (36)	12 (28)	10 (23)	8 (19)
4	3 (8)	7 (17)	19 (44)	25 (59)	28 (65)
5	1 (3)	0 (0)	1 (2)	1 (2)	5 (12)

表17. 「異性との関わり方」の時期的変容

時期 水準	3歳まで	就学まで	小学校	中学校	現在
1	41名 (100)	41名 (100)	37名 (88)	27名 (64)	23名 (52)
2	0 (0)	0 (0)	3 (7)	2 (5)	3 (7)
3	0 (0)	0 (0)	2 (5)	11 (26)	10 (23)
4	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (5)	8 (18)
5	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)

IV 考 察

1. 転帰について

本調査対象者の社会的転帰は, 就労15.6%, 施設入所41.2%, 施設通所39.2%, 在宅2%, 入院2%という結果であった。これに関連する, わが国における最近の諸調査を表18に示した。

表18. 社会的転帰に関する調査

	対象者	就 労	施設通所	施設入所	在 宅	入 院	そ の 他
本 調 査	51 名	15.6 %	39.2 %	41.2 %	2.0 %	2.0 %	0 %
小 林 <sup>5)</sup> (1985)	30	23.3	20.0	20.0	16.7	3.3	16.7
若 林・杉 山 <sup>6)</sup> (1987)	94	13.8	25.5	21.3	26.6	10.6	2.2
後 藤 <sup>7)</sup> (1989)	38	10.5	23.7	42.1	15.8	7.9	0
小 林・村 田 (1990)	197	20.8	22.3	38.0	9.1	2.0	7.8
太 田・永 井 <sup>8)</sup> (1992)	47	19.2	29.8	27.7	0	2.1	21.2

表19. 適応状況に関する調査

	対 象 者	良 (Good) 好	軽 (Fair) 快	不 (Poor) 良	そ の 他
本 調 査	51 名	14.0 %	12.0 %	74.0 %	0 %
小 林 (1985)	90	35.6	15.6	48.8	0
若 林・杉 山 (1987)	101	12.9	14.9	65.3	(死亡) 6.9
小 林・村 田 (1990)	197	26.9	26.9	46.2	0

これによると、本調査は、他調査と比べて在宅や入院が少なく、施設入所及び施設通所の割合が高い。

現在の適応状況についての本調査の結果は、良好(good)14%、軽快(fair)12%、不良(poor)74%であった。これに関連する、わが国における最近の諸調査を表19に示した。これによると、本調査は、他調査と比べて不良(poor)の割合が高い。

#### (1) 対象者のサンプリングに関する問題

本調査の調査者は、表1に示したように養護学校教員、障害児施設指導員、精神科病院臨床心理士等であり、これらの調査者が職場で関与する自閉症は比較的重度の障害を示す者が多かったと言える。また、調査者の中に普通学級や情緒障害特殊学級の教員が加わっておらず、そこに在籍した高機能自閉症者が対象となっていない。さらに、本調査対象者の療育手帳、障害年金の受給状況からみても重度障害の者の割合が高いことが示されている。これらの点から、本調査の対象者は、比較的重度の発達障害を示す者の割合が高いということができ、このことが転帰に関する本調査結果に大きな影響を与えていると思われる。(なお、調査Iにおいて知能検査・発達検査の結果について調べたが十分なデータを得ることができなかったため、この点との関連についての考察は得られなかった。)

## (2) 処遇状況との関連

①幼児期における処遇との関連 後藤ら(1989)<sup>7)</sup>は、年長自閉症の社会生活能力について調べる中で、「就学前の教育が社会生活年齢を高めるのに効果をもっていることを予想させる」としている。本調査においては、対象者の92%が幼児期における処遇の場をもっている。しかし、その割合の高さが、青年・成人期の適応状況の良さと結びついているとは言えない。本調査の対象者が幼児期の頃は昭和40年代～50年代前半であり、本県において保育所や幼稚園における障害児保育が始まったばかりで、自閉症幼児に対する取り組みも暗中模索であった。通園施設等での指導についても、自閉症のとらえ方の「コペルニクスの転回」の頃であり、担当者にとって戸惑いと模索の時期であった。こうした点からみると、幼児期における処遇の有無だけでその後の適応との関連性をみることは無理があり、むしろ、そこでの指導の中身そのものとの関連が問われるべきである。

②処遇変更との関連 本調査において、小学校時期56%、中学校時期15%、青年期23%の処遇変更が認められた。とりわけ小学校時期には、養護学校義務制化(1979年)や情緒障害特殊学級の開設及び増設の頃であり、このことが処遇変更の多さに結びついていると思われる。

処遇変更は、変化に対する抵抗の強い自閉症にとって多大な影響を与え、指導の一貫性が損われる可能性も大きい。そのため、療育効果や社会的転帰に対して大きな影響を及ぼすと考えられる。

## (3) 適応状況の評価について

本調査では、周囲に迷惑をかけずにやっているかどうか、就労できているかどうかといった社会的適応の規準にそって適応状況の評価を行った。しかし、適応状況が良好(good)か不良(poor)かという判断は、より多面的・多軸的になされる必要がある。就労していても、本人が苦痛を感じつつ毎日を送っているとすれば、それは必ずしも良好な適応とは言えないし、逆に、充実して生き生きとした施設生活を送っているとすれば、それは必ずしも適応不良とは言えない。周囲に迷惑をかけているか否かとか、就労しているか否かといった社会的適応の視点のみではなく、本人自身のQOLはどうかといった視点からも予後像を把握していくことが必要であると考えられる。

調査Ⅲの実施に当たっては、以上の問題意識に立って評価基準の作成にとりかかったが、QOLの評価をどのように行うかについて結論づけることができず、一面的な評価のみにとどまった。QOLの評価については、今後の課題として残された。

## (4) 社会的受け皿や援助システムとの関連

本調査において、施設通所者20名の中で、他に行き場がなかったり、働く場がないために通所施設にきている者が7名存在した。このことは、受け入れ条件さえ整備されれば就労可能な者がいることを示している。佐藤(1991)<sup>9)</sup>による、「障害をもつ人々の働く権利をあらかじめ承認して、その受け入れのためにあらゆる努力が払われて後に問題となる『能力』ではなく、当初から障害をもつ人々を排除する構造を残して、その人々の労働能力を云々し、地域生活をおくる資格のようにいうのは決してフェアではない」との指摘に賛成したい。障害をもつ者の働く権利の存在を前提条件として認め、その権利の実現にむけて十分な条件整備がなされるべきであり、その上で、就労率や適応状況の実態が問題にされるべきである。

また、本調査において、就労後のアフターケアを望む声や社会的活動に参加させたいがその場がないという意見が多く示されており、地域生活援助システムを構築することの必要性が指

摘された。今後、就労の際のジョブコーチの派遣やアフターケアの実施、余暇時間活用のための社会的活動の場づくり、自立生活にむけてのグループホームの設立等の取り組みを総合的・体系的にすすめていくことが望まれる。

## 2. 状態像の推移を通して

### (1) 基本障害と療育

自閉症の原因は認知障害であると考えられる。本調査を通して、そこから派生する2つの基本的な障害の実態が確認された。ひとつは、青年・成人期に至っても、言語表出・理解を軸としたコミュニケーション障害が高い割合で残存している点である。他のひとつは、青年・成人期に至っても他人との関わりは非常に限局されており、対人関係障害への対応ということが指導上の問題として強く指摘されているという点である。

自閉症療育は、この2つの障害の改善に向けて、幼児期から積極的、意図的なアプローチをすすめていくことが必要であり、太田・永井(1992)<sup>10)</sup>による「認知発達治療」やTEACCH等のアプローチが有効であろうと考える。

また、本調査を通して、偏食行動は加齢に伴ってかなり改善されていく傾向が認められた。この点からみると、自閉症に対する偏食指導は、幼児期のある一時期のみをとりあげて厳しく強制するというのではなく、将来的な改善の見通しをもって前向きに余裕をもって取り組んでいくことが望ましいと思われる。

### (2) 青年・成人期自閉症の発達課題

①心の安定化 本調査を通して、青年・成人期に至り、こだわり行動が半数の者に示されていること、強迫的なこだわりが増えていること、そして、こだわり行動への対応をどうすべきかが指導上の困難点として強く指摘されていることなどが示された。小林・村田(1990)<sup>2)</sup>は、「強迫傾向は青年・成人期自閉症の中心的精神病理として重視する必要がある」と述べており、森(1992)<sup>11)</sup>は、青年期に入った自閉症の示す「自分という基点の不確かさ」の存在を強調し、そこからくる「質問魔」「確認魔」の青年達の実例を示している。まさに、「自分という基点の不確かさ」と、そこからくる不安や心理的葛藤を如何に克服して心の安定化を図っていくことが青年・成人期自閉症の大きな発達課題である。

また、本調査を通して、かんしゃく行動や自傷行動は加齢に伴って減少してはいるが、青年期に至ってもかなりの割合で残存していることが示された。若林・杉山(1987)<sup>6)</sup>は、自閉症にみられる青年期パニックに2つのグループがあるとしている。ひとつは、「青年期という節目に引っかかって、混乱をきたしているグループ」、他は、青年期に至って著しく退行し「重篤な臨床像の変化を生じるグループ」である。本調査の対象者においても、この両グループの存在が認められた。とりわけ、後者の青年期退行型については、近年、強度行動障害の一類型として注目されており、その原因解明と指導法は今後の大きな課題である。

②活動水準低下への対応 本調査において、青年・成人期に至って活動水準が低下し、寡動状態を示す者が40%を占めた。小林・村田(1990)<sup>2)</sup>も、年長自閉症の状態変化のひとつとして「意欲低下、自発性欠如」をあげ、それへの対応のひとつとして余暇の有効な活用が重要であることを指摘している。本調査の中で、社会的活動に参加させたいがその場がないこと、そのために余暇は家の中での限られた空間のなかで過ごしている者が多いことが示されている。そうした実態が、青年・成人期自閉症の活動水準低下をもたらすひとつの社会的要因として指

摘できる。

余暇時間を有効に活用し、開かれた空間と人間関係の中で充実した時間を過ごすことによって、活動水準の低下を防いでいくことが青年・成人期自閉症の大きな発達課題である。

## V おわりに

本調査の結果は、対象者の転帰が決して順調なものではないという傾向を示しており、関与してきた我々（調査者）自身のあり方も含めて対応や援助が十分であったかどうかについて自問せざるを得ない。同時に、予後像は決して固定的なものではなく流動的・可動的なものであり、それゆえにこそ自閉症への対応や援助の向上を求め続けねばならないと考える。

今後に向けての課題の第一は、療育内容の向上ということであり、幼児期から成人期までの一貫した指導体系づくり、青年・成人期における指導方法の確立、指導者の力量の向上などを押し進める必要があると考える。第二は、自立に向けての社会的条件の整備・充実ということであり、地域生活援助システムの確立や自閉症のための福祉制度の充実などをすすめる必要があると考える。

課題を指摘するだけで問題が解決する訳ではない。その課題に対して具体的、実践的な取り組みをどのようにすすめていくかこそが我々に問われていることを、改めて肝に銘じたい。

調査にご協力いただいた保護者、関係施設の先生方に厚く感謝申し上げます。なお、本調査結果の要旨は、1993年6月27日に行われた第27回東北児童精神医学懇話会において発表した。

## 引用文献

- 1) 鷺見たえ子「レオ・カナーのいわゆる早期幼年性自閉症の症例」(『精神神経学雑誌』54巻, 1952), p. 566.
- 2) 小林隆児・村田豊久「201例の自閉症児追跡調査からみた青年期・成人期自閉症の問題」(『発達の心理学と医学』1巻4号, 1990), pp. 523-537.
- 3) 加藤義男・木村真「自閉症児(者)の処遇に関する横断的研究」(『発達障害研究』9巻1号, 1987), pp. 65-74.
- 4) 加藤義男ら「自閉症児(者)の処遇と指導に関する研究—療育現場からの報告を通して—」(『岩手大学教育学部研究年報』47巻1号, 1987), pp. 95-114.
- 5) 小林隆児「自閉症児の精神発達と経過に関する臨床的研究」(『精神神経学雑誌』87巻8号, 1985), pp. 546-582.
- 6) 若林慎一郎・杉山登志郎「自閉症の転帰と成人期の問題」(山崎晃資・栗田広編『自閉症の研究と展望』東京大学出版会, 1987), pp. 75-99.
- 7) 後藤弘ら「年長自閉症児・者の教育的・社会的処遇状況と社会生活能力」(『発達障害研究』11巻1号, 1989), pp. 49-57.
- 8) 太田昌孝・永井洋子『自閉症治療の到達点』(日本文化科学社, 1992), p. 31.
- 9) 佐藤進「地域社会生活援助のシステム」(『発達障害研究』13巻1号, 1991), pp. 1-10.

- 10) 太田昌孝・永井洋子『認知発達治療の実践マニュアル』（日本文化科学社，1992）。
- 11) 森正子「青年期に入った自閉症たち」（『第8回発達保障講座講義録要旨集』全国障害者問題研究会，1992），pp. 36-39.

#### 資料 「状態像の推移及び現在の実態」質問項目

- \*以下の11項目について、各々、「3歳まで」「就学まで」「小学校」「中学校」「現在」の各時期ごとに当てはまる水準に○をつける。
- \*そのほかに、次の5点についての質問（自由記述）を実施。「言葉やコミュニケーションについて困っていることがあったら具体的に書いて下さい」「各時期にどのようなこだわりがありましたか」「各時期の偏食の状態について具体的に書いて下さい」「各時期に、どういった原因でかんしゃくを起こしましたか」「各時期に、どのような自傷がありましたか」

#### 「話す力」

- |   |
|---|
| <p>(1) 言葉が全くなく、要求も表わさない</p> <p>(2) 言葉はないが、声や身振りで要求を表わす</p> <p>(3) 単語水準またはそれ以上の言葉はあるが、場面に応じて適切に使えない。おうむ返しが多い</p> <p>(4) 単語水準またはそれ以上の言葉を日常生活場面で適切に使うことができる。しかし、まだ会話はできない</p> <p>(5) 簡単な会話はできるが、まだぎこちなさがあり、不自然なやりとりとなる</p> <p>(6) 日常生活の中で、自分の気持ちや意志をある程度表現し、相手の話を受け入れることができる</p> |
|---|

#### 「理解する力」

- |   |
|---|
| <p>(1) 身振りも言葉も理解していない</p> <p>(2) 指さされた物を取ったり、パイパイに答える</p> <p>(3) 「おいで」「ちょうだい」などの単語による指示に答える</p> <p>(4) 「新聞もってきなさい」などの一つの指示にしたがう</p> <p>(5) 「大きいのだれ、小さいのだれ」という質問に正しく答える</p> <p>(6) 「ゴミ箱にゴミを捨てて、それからカーテンを閉めなさい」などの、一度に出された二つから三つの指示にしたがう</p> <p>(7) 今日は何曜日か、たいていわかる</p> |
|---|

#### 「活動水準」

- |   |
|---|
| <p>(1) 著しく活発である。常に休みなく動いている</p> <p>(2) 少し活動性が高い</p> <p>(3) 正常である</p> <p>(4) 少し活動性が低い</p> <p>(5) 著しく不活発である。どんな活動にも取り組むことが難しい</p> |
|---|

#### 「こだわり行動」

- |   |
|---|
| <p>(1) 非常に深刻で、少なくとも毎日ある</p> <p>(2) ひんぱんにある（1週間に数回）</p> <p>(3) 時々、あるいは特別な状況だけで見られる程度である</p> <p>(4) 非常に少なく、それほど困らない（数週間に1回）</p> <p>(5) ない</p> |
|---|

「偏食」

- (1) 一つか二つの物（例、カップラーメンとチョコレート）しか食べない
- (2) 非常に限られた範囲の物しか食べない
- (3) 多くの問題があり、いくつかの食べ物を極度に嫌う
- (4) 気まぐれ食いがあるだけである
- (5) 問題がない

「かんしゃく」

- (1) 非常に深刻で、少なくとも1日1回はある
- (2) しばしばある（1週間に数回）
- (3) 時々ある（数週間に1回）
- (4) ごくまれである（数か月に1回）
- (5) ない

「自傷」

- (1) 非常に深刻で、少なくとも1日1回はある
- (2) しばしばある（1週間に数回）
- (3) 時々ある（数週間に1回）
- (4) ごくまれである（数か月に1回）
- (5) ない

「肉親の大人との関わり方」

- (1) 肉親の大人にほとんど関心を示さない
- (2) 肉親の大人の働きかけを嫌がり避ける
- (3) 自分の要求に関係のあることがらであれば、働きかけに応じる
- (4) 特定の人（母親など）の要求には応答する
- (5) 肉親の大人みんなと交流がある

「兄弟姉妹との関わり方」

- (1) 兄弟姉妹にほとんど関心を示さない
- (2) 兄弟姉妹の働きかけを嫌がり避ける
- (3) 自分の要求に関係のあることがらであれば働きかけに応じる
- (4) 特定の人（母親など）の要求には応じる
- (5) 兄弟姉妹みんなと交流がある

「他人との関わり方」

- (1) 他人にほとんど関心を示さない
- (2) 他人の働きかけを嫌がり避ける
- (3) 自分の要求に関係することがらであれば他人の働きかけに応じる
- (4) 特定の人（母親など）の働きかけには応じる
- (5) 他人と普通に交流する

「異性との関わり方」

- (1) 異性への関心がほとんどない
- (2) 異性からの働きかけを嫌がり、避ける
- (3) 異性への関心はあるが、不適切なかかわりをする（例、触ったり、キスをしようとしたり）
- (4) 異性への関心はあるが、実際の交流はない（例、雑誌のスターの写真を見て楽しんだりする）
- (5) ガール（ボーイ）フレンドがおり、交流がある